



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<書評> 児美川孝一郎『高校教育の新しいかたち：困難と課題はどこから来て、出口はどこにあるか』 (泉文堂、2019年)
Author(s)	横井, 敏郎
Citation	公教育システム研究, 19, 183-189
Issue Date	2020-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80190
Type	departmental bulletin paper
File Information	100_AA11562857_19.pdf



<書 評>

児美川孝一郎『高校教育の新しいかたち：困難と課題はどこから来て、出口はどこにあるか』（泉文堂、2019 年）

横井 敏郎*

はじめに

かつて高校教育の役割を完成教育と捉える時代があった。しかし、いま高卒就職は 2 割程度しかなく、多くが大学や専門学校に進む。高卒で就職しても離職する割合は高く、何度か転職するのもふつうのことである。高校教育は完成教育というよりも、前期中等教育から高等教育の狭間に置かれた過程的教育といったイメージの方が合う。また、偏差値による高校序列化が進んできたが、加えて学科等の多様化も進められ、同じ高校と言っても教育内容や生徒層には学校によって大きな差異が生じている。

高校教育はどこに共通性や統一性を見出せばいいのか、高校教育は何を核に構築されるべきなのか、そもそも高校教育とは何かという根本的な問いがいま改めて浮かび上がってきているのである。本書はこうした問いに答えようとする非常に意欲的で刺激的な書籍である。著者児美川孝一郎氏は、長く高校教育研究を進めてこられ、またこの十数年はキャリア教育を中心にして高校教育のあり方について論陣を張ってこられた。評者は 2020 年 1 月 11 日に開催された北海道教育科学研究会第 192 回研究会において本書について報告を行い、著者とディスカッションを行う機会を得た（筆者の他に報告者として林正憲氏（当時北海道野幌高校校長））。本書評はその発表をもとに執筆し、ここに掲載するものである。報告の機会を与えてくれた北海道教育科学研究会、また議論をともにしてくれた児美川氏と林氏に感謝する次第である。

1. 本書の要旨

本書の目次は以下のとおりである。

- 序章 高校教育の何が論じられるべきか
 - I 戦後の高校教育、政策、理論
 - 1 章 戦後の高校教育政策の展開と転回
 - 2 章 戦後教育学における労働と職業
 - II 今日の高校教育の臨界点
 - 3 章 〈階層的序列化〉のなかの高校—「教育困難校」におけるキャリア支援
 - 4 章 高卒後の進路選択行動と東日本大震災—岩手県 K 地域に焦点を当てて
 - III 高校教育の新たな展開
 - 5 章 総合学科を再考する—A 県 B 高校での実態調査
 - 6 章 新学習指導要領は高校教育を再生させるか
 - 終章 高校教育の新しいかたち

まず本書の要旨を簡単に紹介する。序章「高校教育の何が論じられるべきか」では、本書のねらいや困難と課題、問題設定の視点などが示される。本書のねらいは、次のように書かれる。

* 北海道大学大学院教育学研究院教授（教育行政学研究室）

戦後の高校制度と高校教育の歴史的展開を踏まえつつ、現在の高校が抱え込んでしまっている困難や課題のありようを明らかにすること、および、困難や課題が堆積された結果、今日の高校が、もはや高校教育としての実質を保持することが難しい〈臨界点〉に達しつつあるのではないかという問題提起を行うことにある。・・・困難と課題を乗り越えるためには、どのような高校教育の「新しいかたち」を展望すべきなのかについて、可能な限り点描してみることである。（同書 p.8、以下ページ数のみ記載）。

困難や課題として具体的に上げられていることの1つは、「底辺校」や「課題集中校」と言われる下位校の教育の現実、すなわち授業の不成立、生徒指導上の諸問題、中退、進路未定などである。しかし、こうした困難と課題は、高校の教育制度内でのポジションや制度の構造上、問題点や矛盾が外部に露呈しにくいように「仕立てられている」。すなわち、①高卒後進学率が8割となり、高校は「通過点」となって問題を先送りできる、②戦後の制度的な拡張のプロセスで学校間格差の拡大と階層的に序列化され、問題が集中する底辺校が社会一般の目には映らない、この2つによって問題が見えづらくなっているのである（pp.8~9）。

そこで本書は、高校教育の困難や課題の〈臨界点〉を浮き彫りにするため、以下の2つの観測点を提示する。まず、①〈職業社会との疎隔〉である。高校は職業世界や社会の要請との関係でその役割や機能を定めるのではなく、多様な生徒層の入学、進学競争の激化など、教育システム内の事情への対応を軸にして、制度の再編や教育課程の編成に腐心するようになっている。この事態は高校教育の〈自律化システム〉と呼ばれる。進学競争志向の学習は高校教育本来の意味を転倒させ、高校での学びを「形骸化」「空洞化」させているという。もう1つは、②高校の〈階層的序列化〉である。上位大学への進学を推進することがよりよい学校づくりになるという「錯覚」が生み出され、これが高校教育の「空洞化」から目をそらす巧妙な装置となっている。

次に、1章「戦後の高校教育政策の展開と転回」では、高校教育政策の歴史的転回を俯瞰し、なぜ日本の高校が〈職業教育からの疎隔〉し、〈自律システム化〉したのか、それによって高校教育にどのような困難や課題を招いたのかが検討されている。1950~60年代の教育政策には高校と産業界・労働市場との接続をいかに築くかという視点があったが、その後、高校進学率が上昇し、生徒の多様化が進むとともに、高校は生徒対応に追われることになる。ただ、この時、新卒一括採用と「日本型雇用」慣行が成立し、高校と企業の日本的な接続関係が形成されることで問題は「潜在化」した。しかし、このシステムの下で普通科が増加し、「職業的レリバンス」のない若者が多数生まれるという深刻な問題が発生することとなった（p.39）。また、1970年代以降の大学や専門学校等の高等教育への進学率の上昇も問題を「潜在化」させる役割をもった。著者は高等教育進学率の上昇は高校教育の成功ではなく「失敗」の証左だと言う（p.38）。以上のような分析から、著者は現代の高校生の進路を4つに区分し、①高卒就職（職業教育あり）の生徒にはキャリア教育の推進が、②高卒就職（職業教育なし）の生徒には職業科目設置、公的職業訓練連携、長期有給インターンシップなどが、③上級学校進学就職（職業的レリバンスあり）の生徒にはコース制の導入が必要だと言う。そして、④上級学校進学就職（職業的レリバンスなし）の生徒には、「進学すれば何とかなる」といった「幻想」を捨てさせ、「知識基盤社会」における知識労働者として活躍していくような層はほんの一握りでしかないという「冷厳たる事実」を徹底して伝えていくことが必要だと言う。

2章「戦後教育学における労働と職業」では、こうした戦後高校教育の展開に対して、戦後教育

学主流派が職業世界と学校との関係をどう捉えてきたかを批判的に考察している。戦後教育学主流派は「普通教育主義」に立っており（p.52）、「選びながら発達する権利」（p.55）を尊重すべきだと言うが、労働市場の構造に規定される現実の社会的分業と高校教育が「予定調和的」に折り合う保障はないこと、また公立中高一貫校を支持するような「市民意識こそが、この30年弱のあいだの新自由主義的な教育改革の進行を草の根から下支えしてきた」ことへの意識、視点が弱いと批判する（p.87）。

3章「〈階層的序列化〉のなかの高校―「教育困難校」におけるキャリア支援」では、教育困難校の高校づくりやキャリア支援・教育の取り組みを検討しつつ、依然として〈階層的序列化〉の磁力から抜け出ることができない現実があることを示す。

4章「高卒後の進路選択行動と東日本大震災―岩手県K地域に焦点を当てて」では、東日本大震災という未曾有の出来事を経てもなお変わらない〈階層的序列化〉を明らかにしている。

5章「総合学科を再考する―A県B高校での実態調査」では、総合学科を取り上げ、その可能性と限界について論じている。総合学科においては教育課程全体が効果を持ち、生徒が履修科目を自主的に選択することや通常の科目や授業に主体的に取り組むことそのものもキャリア教育としての効果を持っている（p.142）、職業社会との疎隔に対する「ユニークなポジション」にある、普通科でも専門学科でもない「第三の道」がありうるかもしれない（p.143）と評価する。

6章「新学習指導要領は高校教育を再生させるか」では、2018年に告示された新学習指導要領を批判的に分析している。

そして、終章「高校教育の新しいかたち」では、今後に展望すべき高校教育の「新しいかたち」を示している。高校は社会のニーズへの感度を弱め（p.182）、「通過点」に過ぎなくなっている（p.185）。自らのポジションを少しでもあげるといふ「擬似的目標・目的」を掲げるしかない高校教育がその「袋小路」を脱するには、高校教育の「新しい形」を創造していく以外にないとする（p.186）。「新しいかたち」として示されることは、①「年齢主義」の克服、②学年制の弾力化、③転籍、転入・編入、再入学の活性化、④教育内容の実質的な「多様化」、⑤外部資源との連携（就労支援、福祉、医療、精神保健、ユースワーク、社会体育や生涯スポーツなど）、⑥高校と基礎自治体との結びつきの強化である。

特に④については、高校教育が社会との結びつきを取り戻すことを前提に、生徒の卒業後の進路や将来のキャリア形成の方向性を踏まえて、そこに有意義な効果をもつような教育課程の実質的な分化が、生徒自身の必要性和選択に基づいてなされていくこと、また必要に応じて、必要な時に教育課程を選べ、選び直せること、そうした選択や再選択が有意義に感じられるくらい、それぞれの教育課程が社会と結びつき、生徒の将来のキャリア形成の方向性とリンクしていることが重要だとされる。

①高校三原則、②高校の準義務化、③シティズンシップ教育の課題については論じきれなかったとして、今後の検討課題だとされる。

2. 全体的な感想

高校教育の歴史的展開と現状の課題、これからの展望をこのようにコンパクトに凝縮して検討した書籍はこれまでにない。教育改革の困難を踏まえた上で、なお展望を探究、提示しようと挑戦す

るスタンスに評者は好感を覚える。教育関係者・市民が読んで議論したり、指針にできるような方向性が提示されており、そういう意味でも本書は好著といえよう。

全体的には賛同しうる内容である。評者自身がこの間、書いてきたこととかなりの部分で重なる。比較的最近書いた高校教育に関する拙稿として脚注の 6 本があるが¹、たとえば文献⑤は見出しの通り、まさに高校教育の空洞化を問うたものであり、高校での学びの空洞化、高校多様化政策の現段階、高校階層化と地域・高校の多様性、困難層の子どもたちを包摂する高校、過疎地域の高校づくりと地域づくり、普通科高校における学びの意味の回復などを論じている。文献③も過疎地域で求められる高校づくり 子どもの学習・発達を支える軸になる内容をもった内発的カリキュラム、中学校等との連携、幅広い進路に対応した教育活動・進路、市町村のバックアップなどを検討している。

3. いくつかの論点

(1) 問題の本質と将来像「新しいかたち」の関係について

すでに紹介したように、本書の高校問題把握は、＜職業社会との疎隔と階層的序列化→高校の自律システム化→高校の「通過点」化と学びの空洞化＞といった構図で示される。現状を生んだ問題の中心は「職業社会との疎隔」にあると言える。そこで、高校の現状を根本的に改革するには、「職業社会との（再）結合」が必要となる。「自律化した高校教育システムのあり方を再設計し、再び産業界（労働市場）との「接続」関係を取り戻す必要がある」という（p.36）。

しかし、本書が示す高校将来像の「新しいかたち」とは、年齢主義・学年制・転編入の見直しや外部連携といったものである。評者には本書の言う本質的な問題に対してこれらはやや外形的な改革案のように感じられる。「職業社会との疎隔」が本質的な問題であるのなら、論理上、高校改革はまさにこの点の改革を中心に据えたものにならねばならないはずである。学年制等は基本的に教育制度上の問題であって、職業社会との関係を論じずとも、現行の高校教育制度内で改革できるものではないか。

なお、評者はこの「新しいかたち」に反対しているのではない。実際、こうしたタイプの学校の設立に評者自身、関わってきており、いままそうした学校と多少のつながりをもっている（文献⑤も参照）。また、現在の高校教育の現場から生まれた取り組みを活かすことでしか、本当に意味のある改革にはならないし、総合学科や単位制などの可能性を否定しようとするつもりもない。ただ、本書の問題把握の構図からして「新しいかたち」が本質的な改革案となるのか、さらなる議論が必要と思われる。

(2) 「教育内容の実質的な多様化」について

「新しいかたち」の 1 つとして④教育内容の実質的な「多様化」があがっている。その内容は、

¹ ①「高校教育改革の政策論理と地方の展開状況」『月刊高校教育』41 巻 14 号、2008 年 11 月、②「高校教育改革政策の論理とその課題」『国立教育政策研究所紀要』138、2009 年 3 月、③「高校再編整備と過疎地域の高校存続」『月刊高校教育』46 巻 13 号、2013 年 12 月、④「多部制単位制高校」国立教育政策研究所『高等学校政策全般の検証に基づく高等学校に関する総合的研究（報告書）』、2014 年 3 月、⑤「学びの空洞化を超えて——高校教育再構築の課題」『教育』827、2014 年 12 月、⑥「Society5.0 に迫られる高校」『教育』886（2019 年 11 月号）、2019 年 10 月。

「高校教育が社会との結びつきを取り戻すことを前提に、生徒の卒業後の進路や将来のキャリア形成の方向性を踏まえて、そこに有意義な効果をもつような教育課程の実質的な分化が、生徒自身の必要性和選択に基づいてなされていくこと」といったものである。これはどう読み取ればよいのか。著者の批判する戦後教育学主流派の「選りながら発達する権利」とどう違うのか。社会との結びつきが回復されていることが前提とはなっているものの、その「社会との結びつき」が明確にならない限り、多様な分野や科目を自由に選択していくだけの提案にもなりかねない。上の指摘（1）と同じく、ここでも高校教育と「社会との結びつき」の内実がより深められる必要があるように思われる。

（3）「（職業）社会との結びつき」をいかに回復するのか？

では「社会との結びつき」とは何か、いかにすることが「社会との結びつき」を回復するのか。乾彰夫氏の一元的能力主義論を念頭におけば、欧州のような多元化が1つの方向として浮かび上がる²。本書は、「創造的な知識労働を担う中核的な労働者層」と「対人サービスや定型的な業務に従事する多数の周辺的な労働者層」の二極化の現実と高校教育が「照応」し、適切な「接続」関係をもつには、高校教育の多様化は実質的な複線的な展開を含んで展開していくことを射程に入れざるをえない、それを生徒自らが選りながら発達するという「青年期教育の論理」として併せもたなくてはならない（P.35）、自律化した高校教育システムのあり方を再設計し、再び産業界（労働市場）との「接続」関係を取り戻す必要があるという（p.36）。

しかし、「新しいかたち」の④教育内容の実質的な「多様化」にこのような多元化論、複線化論が含まれているのか必ずしもはっきりしない。少なくともそれを実現するための方策は示されていない。「創造的な知識労働を担う中核的な労働者層」と「対人サービスや定型的な業務に従事する多数の周辺的な労働者層」の二極化の現実を子どもと親に「冷厳に」伝えること、理解させることが重要だと言い、意識に働きかけることが強調されているように思われる。

しかし、高校の「通過点」化やポジションをあげる「疑似的目標」追求は、「錯覚」でもなければ二極化の現実を知らぬ行動でもなく、格差社会で生きねばならない生徒と親にとって賃金や雇用の安定性、労働実態などを踏まえたある種、現実的な判断だと言えよう。よって、こうした事態を乗り越えるには、意識面の働きかけだけでなく、職業資格制度や養成・訓練コースの設置・拡充などが不可欠になるのではないかと。もちろん、ドイツのような早期分化システムは現在の日本ではただちに受け入れられないだろう。またそのシステムがそれほど理想的なものかという問題もある。高校と職業学校の二元システムや分岐型学校体系は明らかに社会階層に対応しており、階層的序列化の欧米的なあり方と言えるかもしれない。しかし、職業資格制度を視野に入れた教育制度構想は「職業社会との再結合」を展望するのに避けて通れない論点ではないだろうか。

（4）「修得主義」について

「新しいかたち」の①「年齢主義」の克服、②学年制の弾力化、③転籍、転入・編入、再入学の

² 乾彰夫『日本の教育と企業社会——一元的能力主義と現代の教育=社会構造』大月書店、1990年、乾彰夫「現代の産業社会と競争—競争構造の一元性と多元性」教育科学研究会『現代社会と教育』編集委員会編『現代社会と教育第1巻現代と人間』大月書店、1993年。

活性化を本格的に導入するには、「修得主義」を明確にすることが必要だと本書は言う。この「修得主義」とはどのようなものか、何を目指しているのか。単位制を導入する、あるいはそれを実質化するという意味だろうか。それともより厳格な課程の修得を求めようとしているのだろうか。高校教育は制度的には修得主義だが、実態は履修主義、年齢主義である。この「年齢主義の慣行を緩やかに壊していくこと」が必要だという（p.188）。しかし、これを緩やかに壊すことができるのかはまた1つの検討課題となろう。たとえば、本格的な課程主義においては、全国共通テストのようなもので一定水準に達しなければその課程が修得したとはみなされない。イギリスの GCSE ように A*~G のランクを付けるような試験を想定すれば分かりやすい。しかし、そうした学力基準で判定すれば、底辺校では未修得者や低ランクしか取得できない生徒がおそらく大量に生まれるだろう。いまの相対競争型高校入試制度も年齢主義の産物だと言えるが、これを変えるとすれば高校入試か中学校修了テストで各教科の修得水準を確認していくことになる。本格的な修得主義の導入は、十分な修得ができていなくても卒業できる日本のある種の緩い高校教育をより厳しいものに変えていくことになるだろう。

本書は海外を参考にして修得主義の導入を提案し、日本の年齢主義を特異とするが、これは高校教育のあり方だけの問題でなく、雇用も含めた社会制度の問題である。日本型学歴社会では高校卒業が決定的に重みをもつが、欧州では高卒だけでは意味がなく、何を修得したかが問われる国もある。つまり、高校改革には社会制度の側の転換が必要になるのではないだろうか。修得主義といっても、学年制や転編入制度などの導入で果たしてそれで履修主義の改革は可能なのか、いったいどこまで修得主義を厳密に解釈して推進していくか、その検討が求められよう。

（5）高校の自律システム化から逃れられるのか？

基本的人権としての公教育も制度化されれば、そこで規定される成果や学歴の取得が学習者の目的となってしまう。そういう意味では公教育制度とはそもそもシステム的であり、ある種の形式性から逃れることは難しい。自律システム化からの乗り越えをどう展望するのか。

高校教育の難しさの1つは、高等教育と基礎教育（義務教育）の狭間にあることだと言える。そもそも高校教育は、能力主義的に分化する高等教育と共通教育的な義務教育に挟まれ、その両面に引き裂かれる矛盾した段階とならざるをえない。大学への進学であれ、就職であれ、何らか次の段階への移行を前提とすれば、高校は「通過点」的たらざるをえない。

高校教育は何らか社会構造の規定を受けているのであって、自律システム化していながらもそれを含んだ総体として社会と接続している。問題は「通過点」化しているというよりも、高校が大学であれ就職であれ、次の段階への移行を前提とした上でいかにそうした進路分化、社会分化に適合的な教育が行い得ているかという点にあると考えられる。ただし、その適合は単に高校側が受動的であることで実現されるのではなく、社会分化のあり方によって大きな影響を受けざるを得ない。つまり、いまの高校教育が社会分化に適合できていないとしても、それは単に高校側の責任ではなく、社会の側の問題でもある。「新しいかたち」とは高校だけで生み出せるものではなく、社会改革との連動が不可欠だということになろう。

（6）職業的レリバンスと現代の職業・雇用について

著者は戦後教育学主流派の「普通教育主義」や「選りながら発達する権利」に対して、「労働市場の構造に規定される現実の社会的分業と「予定調和的」に折り合う保障はない」と批判する。黒崎勲氏は「教育理念による多様化」を唱え、やはり予定調和論を批判していた。ただし、黒崎氏は職業教育を否定してはいないが、その枠組みに職業教育が積極的に位置付けていたとはいえない。むしろ高校教育は社会的分業と距離を取るべきだといっていたと思われる³。こうした考えに基づけば、高校教育は必ずしも職業に直結した内容に特化する必要は無く、幅広い共通教養を多様な材料や方法で提供するものとなる。

ここで考える必要があるのは、現代の職業と雇用のあり方であり、職業教育の提供の方法や職業レリバンスである。農業者になるのに農業高校に行く時代もあったが、普通高校から大学に行き、一度、他の職業に就いてから農家を継ぐのが普通になった。農業は置くとしても、普通教育の方が対応できる職業が拡大しており、高等教育を経て就ける職業が拡大していると言ってよからう。また社会と仕事の変化が激しく、離転職も頻繁になっている。そうした社会状況において、職業レリバンスに応じた教育とはどのようなものなのか、またどの段階でそうした教育を提供すべきなのか。これは非常に大きな難問として私たちの前に立ちはだかっていると考える。

おわりに

以上、児美川氏の著書について簡単に内容を紹介し、コメントを加えてきた。批判的なコメントばかりを並べているように受け取られるかもしれないが、評者は児美川氏と全く異なる立場にあるわけではない。むしろ本書の事実認識・問題認識や解決方向には評者の考えと一致する部分もかなり多いというのが率直なところである。評者自身が明らかにできていないこと、解決方法が見いだせない問題も多く、ここで提示した問題は自分自身への問いでもある。こうして書評を書いたのには、問題を共有したいという思いもあった。

また、高校教育論は日本の教育の受験競争や能力主義、学区制、職業学科・普通科と総合制、総合学科、多様化論といったいくつかの論点をもって、戦後教育学における重要なジャンの1つとして存在してきたが、近年ではこれらをめぐる議論がやや下火になってきているように思われる。その背景として、近年の格差社会や学校から仕事への移行の困難があり、研究の焦点はそうした高校生の貧困と種々の困難、若者支援のあり方などに移っていることがあろう。筆者自身もよりよい高校づくりを進めることが重要だと考えていたが、高校づくりの課題が変化してきたこと、また高校後の困難が明らかになってきたことから研究対象をそちらに移している。しかし、後期中等教育を職業・雇用との関係の視点からいかに再編するかは依然として大きな課題であり、過去のものとなったわけではない。海外でも後期中等教育段階からポスト中等教育段階にかけての教育制度の見直しや職業資格制度の再編に取り組んでいる国が多くある。こうした格差貧困の時代にこそ、あらためて職業社会との関係の視点から後期中等教育の再構築を検討すること、若者たちの雇用への道筋を確かなものにする方途を考え出すことが求められているのである。本書を読んであらためてこうした課題を確認し、引き続き議論をしていきたいと考えている。

³ 黒崎勲「中等教育の平等化と個性化」教育科学研究会『現代社会と教育』編集委員会編『現代社会と教育第3巻学校』大月書店、1993年、黒崎勲『学校選択と学校参加—アメリカ教育改革の実験に学ぶ』東京大学出版会、1994年。